



和漢

朗詠國字抄

五六



和漢朗詠集抄卷之五

雜

風

陰陽激怒の聲より土竅より出て地上にを横行は四時の氣候と時の氣運より或は東あるは南す

春風暗剪庭前樹夜雨偷穿石上苔

春の風が暗に庭の樹の枝や梅を刀で剪るのうらむどくに芽をそくする夜の雨人をもげ偷に石の上の苔穿り

入松易亂欲惱明君之魂流水不歸

應送列子之乘

風中の琴と云願くは風の吹く琴の音交り聞るとは意へ風の松吹入る音ハ琴と聞かざる實ハ風をもバ乱易琴に入松の曲ありと王明君漢帝

の諱の字は避後昭君とす匈奴と和せん昭君を胡國へ嫁む其道すがら琵琶を誦く心を慰る今松風の琴の乱るハかの琵琶も合

雜

風

春の風暗に庭前樹を剪る夜の雨を偷に石上の苔を穿

入松亂易明君之魂を惱さんと欲流水不歸列子之乘を送る應



漢主の手中に吹
て駐不徐君の塚
上の扇で猶懸り

班姫扇を裁して
誇尚す應列子車
を懸て往還せず

女は魂を憐れんとて琴の流水の曲あり又車の名は流水なり漢書に
出列子名は禦寇風を乗み吹きて空中城行一人今流水の曲城
をめぐり風の曲を吹く云んとて流水の車歸終を
列子が乗を送りて一人と作りし列子道學一家を成り

漢主手中吹不駐徐君塚上扇猶懸

北風利し劍の如くと云題へ漢主高祖三尺の劍を提て天下

とくも従ひたり帝王の詩に今此劍ハ風也手中にも駐す呉王の弟季札

賢者之王の使として魯に行道小徐の国の君が宿りし季札の佩る劍は

去歸る徐の君卒し悲し墓に至塚の松小劍を懸て去りて史記

小出されば季札が劍ハ猶今も風の扇ハいと云て北風劍のどたを云

班姫裁扇應誇尚列子懸車不往還

清風何の處小隱ると云題を作班婕妤好團雪の扇を作持

炎天風を怨も誇り自り吾を尚下裁ハ素に純を裁扇小制夜より

姫ハ女と云同ト雪の詩に秋列子の詩の出礼記七十七一車

を懸と云あり仕を止車を揚りけ乗ありくとをせしむ風止る意

後撰 秋風の吹かつてもとぬれ秋乃葉るはは

戀哥へ戀人のくもてはる心の秋風を恨むむ折ハ秋の葉をよに音

つゝかぞ秋風吹かつてもとぬれ人いともぬと此人秋の葉もわハ音信

はのくやるぬの月れは秋の葉吹ちりすハ清ハ風

あくと残りける有明の月影に山嵐に散りちぢのまはるるハ面白
この歌三十四字ありども耳にせずと云る

雲

陰陽の氣聚るハ山の草木水氣を吸て大陽ハ蒸升
され雲となり風に散らるハ氣濃るハ雨ハ降る

竹班湘浦雲凝鼓瑟之跡鳳去秦臺

月老吹簫之地

愁の賦へ楚帝の女娥皇女英二人とて舜帝の后とて舜の崩るハ
を悲し湘浦の岸小立て泣く涙竹にそと班に染り後生出る竹

班ハ后心を慰めんハ瑟の聲を鼓むハ后かられハ湘浦に葬り

瑟は志也跡ハ雲凝れれば人かくるハ哀なるぞ秦の楊公の女

作證

張讀

山遠して雲行客
の跡を埋松寒て
風旅人の夢破

盡日雲を望み心
繫不時有て月夜
見を夜方に開あり

漢皓秦を避之朝
望孤峯之月
陶朱越を辭す
之暮眼五湖之
煙小混す

呼王を蕭史の妻す夫婦よく蕭を吹て鳳の鳴はす數年の後鳳その
屋にさる二人のこめを臺を建鳳臺と云後仙となり鳳に乗て去と列仙
傳に出今鳳去てあともれ蕭を吹跡は唯月のこまをば
住て久しくちるば老りと意ハ上の句は同一

山遠雲埋行客跡松寒風破旅人夢
愁の賦へ遠山の雲ふれびき行客の跡を埋
松風寒して旅人の夢破むすび得ざるぞ

盡日望雲心不繫有時見月夜方閑
盡日終日朝より夕まで雲を望む心わくがまて浮立を繫とめざるぞ
時わけて月を望む夜も閑小物哀之此詩聞女幽栖と云題して独任女の意

漢皓避秦之朝望礙孤峯之月陶朱
辭越之暮眼混五湖之煙
賢人の隱る如其上の雲ふれびき其氣をのぞきて隱士あるを知を題す賦之
漢の代に東袁公綺里季夏黃公用里先生四人の賢人老て首皓

四皓と云秦の始皇の乱政を惡く避て都の南なる高洛山に龍かこも
處るやどの其山上小雲ふれびき孤峯にかかぬ有明の月を礙かく
す越王勾踐呉王夫差と會稽に戰負主從呉の檢とるを越
の臣范蠡が謀りて免れ終つて呉王を亡りり范蠡すては大事をどげ
大石の下より久しく居るに飛鳥尺で良弓かゝる老子も功成名遂て身
退て天の道なりと云を思ひ妻子城將て小船に乘五湖のまづらに
浮ひ去て齊小行餘多の金を滿陶朱公と云り其越を去て湖に浮ぶ
水煙と上小掩ふ雲とが混かたり眼かんまふ大湖丹陽湖青草湖彭
象湖射陽湖を五湖とす又大湖の別名其周行
五百里なりと云五湖といふとをさるる

暫崎嶇非戴石空
峻嶮偷も豈松
を生せんや

漢帝の龍顏所
處小迷淮王の雞
翅失雷連

暫借崎嶇非戴石空偷峻嶮豈生松
淵明が四時の詩小夏雲多奇峯と云句を題して夏の雲立都在中
外さるる奇峯の聳るるに似る暫借崎嶇を借とも實に石を戴
山はあはれ空く峻嶮を偷れども松の生せん
まとの山はあはれと豈はくんとく同一

漢帝龍顏迷所處淮王雞翅失雷連

翅ハ雷連を失え

晴

煙消門外青山近露重窓前絲竹低

紫蓋之嶺嵐疎雲七百里之外瀑
波冷月澄四十尺之餘小澄

雲碧落天膚解風清漪水面皺

明永國字抄

秋無片雲と云題は秋の天晴片の雲も無く漢帝高祖以言

御父太公御母劉温大澤の堤の昼寝をり空俄々雷電せぬ

太公往てん龍降て嫁り子を生其面龍のけりあり高準

とて鼻高髻髪髪うつく龍の股に七十二の黒子あり名邦字の秦の

都の巽に住る秦の始皇東南の天子の氣立のむと聞尋杯殺せど

と有也芒碭山かかまらり其居る上かつの五色の雲立をわめては

舞の呂后を尋行へ始皇崩れわどれく天下劉赤子位に即高祖と

云是く史漢小季帝王に龍顔と稱する今に始る今つ心空晴雲

と云れぬ其の高祖の處多所ある尋迷る所は虚字處は實字

かて居と云義は淮南王劉安仙道を得り小薬を攜り日の庭に有

る雞犬もが胡れば飛行を得て大天に唯雞空に鳴らり

空晴て雲もればかの雞の翅を連り雷るとを失しとて

新古今

よるののうんてやをかんらるるたす此の雲のを

戀の哥へ思ふ人城峯の白雲ふらふてさう

葛城高天とらに大和国の名所なり

晴 晴天より雨あつて新
はるの霽の字とら

煙消門外青山近露重窓前絲竹低

雲煙消て晴と青山を門外近くと露重げ窓の前の
絲竹低とて晴興の題として作し

紫蓋之嶺嵐疎雲收七百里之外瀑
布之泉波冷月澄四十尺之餘 藤惟成

唐の五岳の中南岳を衡山と云周旋する數百里高四十二丈と云
其嶺を紫蓋と名づく天晴ま白鶴その上の翔らり此山嶺嵐を
東南長沙まで七百里と云其間へはるるの雲吹拂るを收と作し
天台山に四十五尺の瀑布あり白くして布を晒し泉の波冷く月澄
照す山晴て秋望と云題を作る詩の序は紫蓋瀑布小山を以
雲收と月澄と晴と秋の望景色をいへるなり

雲消碧落天膚解風動清漪水面皺

碧落の雲消て天の膚すたる衣を解脱して肌のみある
と麗るる云風が清き漪を立て水の面皺るる波少く錦の文の

卷之五

雜

四

雙鶴出阜披霧舞孤帆連水與雲消
て雲與消す

嵩歸鶴舞日高見飲渭龍昇雲殘不
昇て雲殘不

雙鶴出阜披霧舞孤帆連水與雲消
空晴る殘飲び雙の鶴が阜出雲を披て高舞逢の沖舟菅言
ふを孤帆と云ぞ孤帆へ海を行くは遠く幽なり雲消るは

歸嵩鶴舞日高見飲渭龍昇雲不殘
晴後山川清と云題して上の句山下川を云り阜居る鶴
う晴を美しく嵩山に歸るとの舞が日も高て見ゆ晴るをいふ日高
て作周の吳王の太子王子晉笙を好伊洛の水辺に遊び鳳鳴の曲を吹
道士浮丘公と云ひ嵩山にすまると二十餘年終に仙道を得て鶴駕

かの山より候氏山に往來せりと云故事をよめり胡国より漢に入る黄河と
云り涇渭を流る清渭濁より原に黄河の水より黄なるもの
名を秦の文公の時終南山より黒龍出て渭水を飲と史記ありかの龍昇
て雲殘ぬ川の晴るを作るとの句を歸嵩飲渭音ひむ説長れ客
原本
作者
名

春の麗る空に有る無るもくもく又八馬のそりあ
かを似るものあり莊子に野馬ハ遊糸とて遊これ春の詩が釈

曉

夜曙て日輪の昇
る程を云晨

佳人盡晨粧於
遊子猶殘月於
行函谷に鷄鳴

佳人盡飾於晨粧魏宮鐘動遊子猶
行於殘月函谷鷄鳴
賈島

曉の賦より魏王の宮中三千の美人佳人が晨に化粧をす曉の鐘が
動響遊子ハ諸侯の国に遊ぶ士の旅人の残月を行く鷄鳴て朝告
る秦の昭王の時齊より孟嘗君質して來居る此人の藝あまを食か
むに門下の客三千人か及ぶある人秦ハ虎狼の国と云ふと云ふ
客の中に狗のものを得るその在るに昭王の狐白の裘を盗せ晝夜美
人か昭王にいと申させ夜中都城出逃去に函谷関をこりてまは夜
深く通る客の中に雞のものを得るその樹の上り鳴る關路の鷄
これ鳴つてす夜明くとそひけり孟嘗君関を越道歸ると史記
は是のものをばけり和歌あり
雞の虚音ハ謀ともとあり

幾行南去之雁
雁一片西傾之

幾行南去之雁一片西傾之月赴征

月征路に赴獨行
之子。旅店猶肩り。
孤城に泣百戰之師
胡笳未歇未

嚴粧金屋之中
青蛾正の畫罷宴
瓊筵之上の紅燭
空餘空餘

五聲の宮漏初
明後一點の窓
燈滅と欲時

但雙松の砌下
當有更に一事の
心中に到無

青山に雪有て松
の性を諳。碧落

明永國

路獨行之子。旅店猶肩。泣孤城百戰
之師。胡笳未歇
謝觀

曉の賦へ南渡來る雁の聲々幾行飛つる空は西傾在明の月が
只一片ある追討使の命を蒙り征伐の路に赴き衆は獨行の男子
旅店に宿る肩もまぶ明も曉も猶肩り胡を防ぐ孤城に在る萬
里都を思て泣出て百戰百勝の軍は衆師の耳目胡の笳
曉かうりて吹歇さる哀れなる葉をまけて吹此胡笳
都の人聞てハ志さる哀れなる百戰百勝孫子謀攻の篇の字

嚴粧金屋之中。青蛾正畫罷宴瓊筵
之上。紅燭空餘
同

上小同賦金屋は后の宮に漢の武帝幼と云美女を人々の
彼を得バ金屋を造て置一と云一と嚴に粧する金の屋後宮の
華麗の中は美女も曉も化粧青蛾を畫夜の酒宴の
罷る瓊の筵に紅燭空餘も曉のさる一説に嚴粧ハ美人粧

五聲宮漏初明後一點窓燈欲滅時

禁中に侍夜此詩を作元九贈宮中小漏刻設置て時を計
一夜を五ツに分ち初更より五更小する五聲ハ五更初て明ハ曉之窓ハ
うづる一點の燈滅んと
する曉方のさるど

あつらひのさしほるをまればいひさるればや
あつらひ別の曉を怨む戀哥
白露ハなごといそん枕詞

松

但有雙松當砌下更無一事到心中

白氏新昌の閑居の庭に松を雙植れ砌に當と云家に近と云意
世を道れハ世の中の事ツを心に到と云るなり

青山有雪諳松性碧落無雲稱鶴心

卷之五

佳

小雲無一鶴の心
小稱り

琴高曲を改煙
吹て後蕭瑟心
催雨を學辰

千丈雪を凌
康之姿に喻應百
歩風に亂誰
由之射を破ん

九夏三伏之暑
月六竹錯午之風
を合玄々素雪之
寒さ朝小松君子
之徳を彰

十八公の榮ハ霜
の後小露一千年の
色ハ雪の中ハ深

青山ハ松山の色雪降時こそ松の性寒小犯れず貞木と諳
い知らず諸樹花咲みどりの時ハ松の操をわかれぬ世乱きて賢
人のあつてもいぬとて碧落に雲なく鶴
晴天をうらこぶを心にうらんと作り

琴高改曲吹煙後蕭瑟催心學雨辰

松風の秋の韻あを題と高秋の吐音松風を琴此ハ松を
煙とふせり常盤の松の声も秋風吟を尋常の響音にうら意
曲改と云く蕭瑟も風の聲樂の器に比し雨を學ハ松の
音雨似と云く松の秋風に雨の音あつてものづ秋の心を催す

千丈凌雪應喻嵇康之姿百歩亂風

誰破養由之射

紀納言

柳化して松と爲賦ハ千歳を経る柳ハ變じて松と云とあり
千丈の松雪を凌寒小犯れず緑と云く晋の嵇康字ハ叔夜七賢の威儀
嚴然として形容さるるハ山濤七賢の一人歎じて孤松の独立と云け
るし晋書の出れを彼姿に喻と作る楚の養由基ハ弓の名人の

て百歩退て柳の葉を射る百歩退て百歩中と史記に出今ハ
心ハ百歩に風に亂る柀あり何者ハ彼射をさるるハ千丈ハ松百歩ハ柳

九夏三伏之暑月六竹錯午之風玄

冬素雪之寒朝松彰君子之徳

順

河原院の賦ハ融の大臣の白宅と奥州鹽竈の浦の景らハ面白前
るりそのありさめを述夏三月と九十月此九旬を九夏と云三伏ハ網涼
の詩小初あり錯ハまじり午ハ南方夏之火涼ハ風火氣錯ハ心と
錯午の風と云錯をあやると訓ハ風はく夏を犯ハあやると云り
夏の暑ハ竹にすじ風を冷玄ハ黒之北方の色冬に配素ハ白
君子有徳賢者を云世の濁ハ汚れず松の雪霜ハ犯されず小松と云

十八公榮霜後露一千年色雪中深

歳寒して松の貞を知題ハ丁固と云人腹の上ハ松生ると夢
んて松ハ十八公と書るもハ十八歳と云ハ公と云ハ詞のてん

露と會松録ハ出松を十八公と云てハ松の榮ハ霜降後
露と梅林子ハ松の齡一千年と云常盤の色雪のうちハ深

雨を合嶺松天更霽焼秋林葉火還寒

合雨嶺松天更霽焼秋林葉火還寒

嶺の松風が雨の音に似れを合と云實の雨をね天霽である
林の紅葉其色火のてく秋焼焼と思實の火をね秋の晩也還て寒は火と

我入てもくくくぬらきる岩の飛松いくよ魚ぬん 後人思

住吉所明神、振津國之姫松の松の惣名松向て問
此歌伊勢物語より色は在五中將のころあり

わくくく地祇云又住吉ハ伊勢諸尊日向の小戸の橋の憶原に御被
しるる時潮に現る御神之後小神功皇后神勅によりて振州にいまひ
よりされ此神此国に跡もる天降現人神ともいふ

竹

煙葉蒙籠侵夜色。風枝蕭颯欲秋聲

涼州の金狐相公竹を愛せり詩を樂天に贈る和韻之竹の葉の緑白
煙に似るる茂く蒙籠夜の如きも侵し晝る夜小似る意竹の枝風

阮籍が嘯場ハ人月ハ歩子猷が看處ハ鳥煙に栖

阮籍嘯場人歩月子猷看處鳥煙

晋の代ハ七人の賢人竹の林に住琴を彈詩を作酒を飲て
樂たり阮籍字嗣宗其一人之竹林に月城かんくうと好まあり人を

月に歩と云之層林を吹を嘯と云晋の王羲之が子王徽之字子猷
猷竹を愛せり竹葉青く茂る煙はんが雀かとの遊ぶるを煙に栖
と作し竹に栖小鳥は逍遙の友とせりてわり
此句ハ竹枝詞ハかくハ作るなり

晋騎兵參軍王子猷裁我稱此君唐太

晋の騎兵參軍王子猷裁我稱此君唐太

種一唐の太子賓客白樂天の愛て吾友と爲

近笋未鳴鳳乃管城抽未盤根絶引龍の文を點す

子賓客白樂天愛爲吾友

篤茂

脩竹が冬も青てあるを題する序晋の世に騎兵參軍と云官あり王子猷竹を愛し此君と稱し今竹の異名とある詩前唐の代太子賓客として春宮に學問を教ふる司馬姓白秦の白公居易字ハ樂天北の窓に植て竹を友とせしと白氏文集に云ふ

近笋未抽鳴鳳管盤根絶引龍文

笋の數多芽抽出せし水の近下とに短く笛やど抽出ぬ黃帝の臣伶倫氏崑崙山の竹枝管以作鳳凰の鳴也字ハ笙此の始より盤まらる竹の根が土よりあつて出でて即ち龍の鱗の文を點す也延喜帝禁中の竹枝植あふ枝作る年経ざるは未抽絶の字ハ

世の中外経て行むものいひはるく鸞の音に我音にるらち

吳竹の葉細さよのほ杯の竹世といひやといふらんため

時雨ハ草木色うつろものけるは竹のよはた時雨の音をうせくへても翠の色ハかちぬ竹の櫛を感せと古六帖ハ志ぐれまるとあり

草

沙頭雨染班班草水面風馳瑟瑟波

沙頭に草の萌出するが春雨に班々青くづく水面に風馳波が打くる瑟瑟ハ波の聲

西施顔色今何在應在春風百草頭

吳越を伐て王城擒ふ越王西施と云美女を賂て王を救ひ元稹竟に吳王城亡す越王又西施を愛あふ小を范蠡諫て五湖に浮ば時彼

を氷に沈め失ひたり其顔今何在と尋む春風百草吹らびる處小を在ると古盛らる吳越の王も亡び愛せ美人の侍らこのらて空し春の草原物あをれるさふ又莊子に西施の面をま眉を鬢するさふいく媚あひかを醜女も身を受ふいひく醜らとあり

瓢簞屢空草滋顔淵之巷藜藿深鎖

草 沙頭雨染班班草水面風馳瑟瑟波

西施顔色今何在應在春風百草頭

瓢簞屢空草顔淵之巷の滋藜藿

深鎖雨原憲之
樞を濕

雨濕原憲之樞

直幹

草の色ハ雪晴て
初て布護セリ。鳥
の聲ハ露暖小と
漸綿蠻

草色雪晴 初布護 鳥聲露暖 漸綿蠻
春日の山居を作りて雪が晴て草が萌布護鳥の鳴
露暖小ゆるやかに漸にゆく詩に綿蠻鳥の声とあり
後江相公

華山に馬有て蹄
猶霞傳野人無

華山有馬蹄 猶露傳野無人 路漸滋
山海經に太華山高五千仞廣千里とあり周の武王殷の紂王を唐虞
亡馬を華山に放牛桃林に繫世治て兵車兵馬を用ざるを示す

と路漸滋

尚書小ある本文にも草が若たぬ蹄をくぐらるる殷の高宗武丁御
父の喪に三年言すとて政もさへくさるる賢臣を得て振政せしめんと
を布多ある夜夢に相成得るといふ其象を画り尋求るやこれ傳
野の岩窟小住る翁を得來る果して賢者我川を渉らば汝を船積
とせん義和は汝を鹽梅とせん宣ひ傳野に得て説の也傳説と
ある此人出去る也餘に人跡なく路小草も漸滋る

かちあさの森の下をらひぬまぶるすさげらるる
旋頭哥上の句五七七七下の句五七七と文字の數をいふ上五文字再び
返唱するなる色はうをめぐりも哥とけり波岡に草川夫子尔を
川べうげ其まわしめ君が來ん時の御鉢かせんよまを
ささうかよとてくろくをハ制す詞まへに馬の飼草なり

古今一みくもあらず大荒木の森ハ山城此五文字あわらんとむと云
草老ぬまハ駒も愛せば人ほと人の老を思ひ捨るはとん不愛ん
やうすともまはるる人まを同むをくまの月にまをせしるん
忠見

野を焼く草薙出さる日と火その燃ると萌とを云けううが春日
と云け其名の通る此日に任せけと上のらん治定るかん下下知る

鶴

嫌らく小人か而
高位を踐と鶴
軒小乗有悪々
利口之邦家を
覆と雀能屋
穿

嫌小人而蹈高位鶴有乘軒惡利口
之覆邦家雀能穿屋

賈嶋

軒小乗有悪々
利口之邦家を
覆と雀能屋
穿

同李陵之胡人
但異類は見

諸鳥を臣と鳳を王とする賊小人愚る者を云帝王の臣下ハ
オるは身して位不在は嫌と衛の懿公鶴城愛して大夫の位を
軒に乗て俱に行ふ國人諂心と云け攻へる時鶴に防
多くと云て扶す公を殺し其肉を食ひ肝をうり残し去り弘監と
云臣其肝を取已ぐ腹をばは是はちこら死しうと史記に出鶴城愛
一國城亡しは東禁志心鳳城王とする題は口利が善者は議
已高位に経昇て終るハ君は詐邦家は覆は悪ると論語の文之
雀が屋を穿損ハ利口の邦家は覆は同トモ詩の句は取

同李陵之入胡但見異類似屈原之

在楚衆人皆醉

皇甫曾

屈原之楚に在
に似る衆人
皆醉

群る雞の中に鶴の只一羽下る意の賊ハ李陵字少卿漢の武
帝の時大將軍として匈奴と戦まけ降るる其胡國に入る時んる
この皆類を異小李陵一人の都人として鶴小壁言楚の屈原湘江
の漁父に對し衆人皆醉我独醒ると云衆人を雞小比す 葉の詩季

聲來枕上千年鶴影落盃中五老峯

聲ハ枕上に來千
年の鶴影ハ盃中
五老峯

春の部躑躅の詩に晚葉尚開と云其次の句くや元氏が溪の
家居に題せし五老峯に啼鶴の聲枕上に聞る酒をくめ盃の中に
山の影が落る廬山五老の峯あり四時雪消す白頭いよと
五老峯と云此名はこれかろて溪の住家は称美せし

清喚數聲松下鶴寒光一點竹間燈

清喚數聲松下
の鶴寒光一點竹
間の燈

松樹の下に喚鶴の聲を清て聞る竹を植て窓の小燈一
光し寒く寂しはさぬ是在家の出家と云題して俗僧の境異

雙舞庭前花落處數聲池上月明時

雙舞ハ庭前花の

上月の明る時

鶴舊里に歸

龍新儀を迎陶

安公之駕眼在

樂天鶴贈詩や庭前花の落とるに二羽雙舞
池上に月あさくらなる時數聲啼とつゝ意なり

鶴歸舊里丁令威之詞可聽龍迎新

儀陶安公之駕在眼 都良香

神仙の題して作る策の文晉の哀帝の時丁令威仙遊山かへて
歸す千歳経て白鶴とて舊里の花表に啼我も丁令威

火散ト上り此糸の色天のつぎ井る小ぞ怖居るに朱雀治上

まほり天赤龍降七月七日汝は印と竟に安公天上

仙偽談と云 べつべつとの意

饑餓性躁公念とて乳老鶴心閑緩緩眠

此意山に題する性躁は餓れ食へて念々乳 都良香
鶴の性閑ゆるが老れればいよと緩々小眠る乳とまのこゝん

叫漢遙驚孤枕夢和風漫入五絃彈

霜の降天の鶴聲のこ啼さば霜はむと甚は順
かも啼漢天漢空の意に用ゆる孤寢の枕鶴の声小夢我驚す

又風に和く漫れ五絃の琴は彈曲小入

此詩霜夜小鶴の聲は問題なり

拾遺 ちりやにむらさきつるさねのあひぢらるるか

和歌浦紀伊国海平無潮もろく瀉が無たらん又一説は去あは

方平無つ方もや鶴のつらと朝のともば芦邊水の邊若直

五条内侍のうら賀にある大虚く空のて群居ハ飛つるなり

これ助字さかづく内侍のうら十年のよさいるんて成ちのらん

鶴の心は我がこゝろに

漢に叫で遙小孤
枕の夢我驚し
風に和く漫れ五
絃の彈小入

饑餓性躁
公念とて乳老
鶴心閑小て緩
緩とて眠

猿

瑤臺霜滿一聲之玄鶴天小喚巴峽秋深五夜之哀猿月に叫

江巴峽從初字成猿は平陽を過て始腸を斷

三聲の猿の後郷淚を垂一葉の舟の中病身を載

胡雁一聲秋商客之夢を破巴猿三叫で曉行人之裳を露沾

天津風、空に吹風、吹飯浦、和泉國の名所、雲井、大内、これと、清正六位藏人、天子の御前、近くも、参りに極、鶴、巡、爵、とて五位に、叙せしめて、從五位下、紀伊守、小倉、藏人、を、やめ、地下に、くぐる、あり、還昇の志、ある、ゆへ、身、成、田、鶴、に、と、く、か、ど、う、又、雲の上、昇、殿、せ、う、あ、と、

猿

瑤臺霜滿。一聲之玄鶴喚天。巴峽秋深。五夜之哀猿叫月。

射觀

清と云賦、瑤の臺に霜滿、以て老るる玄鶴、一聲、天に喚く、山との間を峽と云二峽山とて、三つめ、ら、ら、る、間水の流、も、面、る、さ、ま、巴の、い、た、ゆ、巴、峽、と、云、猿、多、任、國、に、下、人、こ、の、酒、成、酔、て、送、る、人、と、別、を、あ、む、小、曉、近、た、五、更、の、比、其、地、景、の、清、さ、れ、月、小、叫、猿、の、色、哀、

江從巴峽初成字猿過平陽始斷腸、蕭處士と云人黔南と云、行、送、詩、て、秋、の、部、月、の、詩、白、不、醉、黔、中、と、云、前、の、句、江、の、流、三、峽、に、入、て、巴、の、字、成、書、る、と、云、

野之巫陽も同ト、つ、ま、の、山、か、て、其、を、過、こ、巴、峽、に、至、る、猿、の、こ、と、ハ、前、の、詩、小、出、る、か、一、腸、も、斷、ら、う、思、ろ、初、と、ハ、此、景、の、面、白、を、こ、つ、け、ろ、當、意、始、て、の、字、ハ、唯、今、の、哀、情、切、る、る、ち、ろ、二、義、あり、

三聲猿後垂郷淚一葉舟中載病身、樂天江、司馬、に、左、遷、せ、ら、う、舟、路、か、て、妻、女、へ、贈、り、詩、や、宣、都、山、川、記、に、三、峽、の、猿、の、聲、の、哀、と、三、聲、に、至、り、巴、間、者、淚、を、流、さ、る、ハ、か、一、と、あ、る、と、云、故、郷、に、戀、る、淚、が、垂、黃、帝、の、時、木、の、葉、乃、水、に、浮、ぶ、理、か、う、て、舟、を、造、る、ろ、一、葉、と、云、又、一、艘、の、舟、と、云、義、小、も、通、ず、病、身、と、ハ、自、己、の、あ、つ、さ、ぬ、を、云、一、と、

胡雁一聲秋破商客之夢巴猿三叫、曉露行人之裳、江澄明、

人煙一穗秋村僻
猿叫三聲曉峽深

曉峽蘿深猿一叫
暮林花落鳥先啼

谷靜終聞山鳥語
梯危斜踏峽猿聲

人煙一穗秋村僻。猿叫三聲曉峽深。
僻處にある村邑秋の寂しさに一筋立昇る人家の煙の穂の
穂の出るに似たり曉小峽山の猿三聲叫ぶるに深山の閑寂さ

曉峽蘿深猿一叫。暮林花落鳥先啼。
曉山の峽の蘿深小猿の一聲叫ぶ寂しさと暮る夕暮の
の林に花落るに鳥の啼音こびりたる山中感懐の題

谷靜終聞山鳥語。梯危斜踏峽猿聲。
山寺の僧の里小出て山中歸城送る幽谷小住問人もなく
鳥の音浅友とするの深山の谷より谷へ渡る梯斜て危く山の間に
猿のなくハ声浅踏て
行心地やう

古亭
こびりたるに申さるは助字なりてはくは峽と申非文と
兼て色入寛平法皇轉西川に遊る日御遊の時猿山のこびり叫と

り小題のゆゑ法皇の御幸をまは山のうひあるて百ふてはるれくと
ふみり足曳ハ前かまら山といえん枕詞高に足をひき歩むるを

管絃 付舞妓

文選の註に吹を管といひ撫を絃といふ笙或箏篋
はては笛を管と琴瑟琵琶箏の類ハ絃之舞妓也

一聲鳳管。秋驚秦嶺之雲。數拍霓裳。

曉送候山之月。
公衆億

連昌宮のありしを成賦せり鳳管ハ蕭々昔黃帝伶倫をして崑
崙山の竹伐して鳳凰の啼を學ぶが蕭々起る秦國の雲ふた

嶺まての宮の歌舞の聞ゆる數の拍子めて曲を奏候山の
月更る曉も舞ふ傾く月送る意ハ葉法善唐の玄宗を諷
月宮に至樂志浅聞よりて霓裳羽衣の曲を作るとり候氏山
と云ハ王子晋仙道を得て去て此山に來蕭々吹とある因り
末の仙家の

第一第二絃。索索秋風拂松疎韻落。

管絃

一聲の鳳管。秋
秦嶺之雲を驚
數拍の霓裳。曉
候山之月送

付舞妓
第一第二の絃
索索秋風

松を拂て疎韻
落第三第四
の絃冷冷
夜鶴子を憶て
籠中に鳴

隨分の管絃は
還て自足等閑
の篇詠人不知
被

頓令燈下に衣を
裁婦を令誤て
同心一片の花を
剪令

羅綺之重衣為
情無機婦於
妬管絃之長曲
不在關不を伶
人於怒

落梅曲舊て脣
雪を吹折柳聲
新して手煙枝
掬す

第三第四絃冷冷夜鶴憶子籠中鳴

第五絃聲尤掩抑瀧水凍咽流不得

樂府の五絃彈の文人孔子家語に舞五絃の琴を製南風の
詩を讀みよと長三尺六寸四分一年の日數三百六十四日象り
五の絃は木火土金水の五行表し一より素々みまると秋風の
松を拂ふ聲に似てとらに意を疎韻落とら冷々すまの
夜鶴子哉思ふて籠中に鳴り物哀なる色は別鶴曲鶴房曲杯
あつらふ掩抑の滯ると云と瀧の水を凍に咽で心よく流るに
流水曲あはし

隨分管絃還自足等閑篇詠被人知

衆と樂するふあつらふも我分隨管絃るも還自満
足すると云心等閑尋常口号に詩文篇詠も人に知つや
頓令燈下裁衣婦誤剪同心一片花

夜笛を聞題の笛は落梅の曲わり燈の下に衣を裁
婦の笛の心が移り一片の花文を裁さつくと剪誤る曲と同心とや
羅綺之為重衣妬無情於機婦管絃

之在長曲怒不關於伶人

春娃無氣力と云春の娃女がふをゆる気力もけり意を内宴を
作する序に此美女は羅綺も重衣と思つらふを機婦の
情やうもかく重しとら織出せとら妬管絃の曲が長るれ舞
小氣力にわむに音樂の關するを伶人に怒關本に關又關作非

落梅曲舊脣吹雪折柳聲新手掬煙
上の句は管下の句は絃の笛は落梅の曲あはし梅の花の落雪
小似する意とてかの曲を吹雪枝吹かてあると琴に折楊柳の曲有
た柳の色翠なる煙小似る心よてかの曲を
弾むと煙を掬ふてある

相如昔挑文君得莫使簾中子細聽

言語巧に偷鸚

鷗の舌文章分

得る鳳凰の毛

錦帳曉開雲母

の殿白珠秋寫

水精の盤

昨日山中之木

材を已固か取

今日庭前之花

詞を人於慙

王朗八葉之孫

徐詹事之舊草

淹一時之

友范別駕之遺

文を集

一本懐くんとて卒に樂天其序を書て此絶句を書て
其集三十卷軸々金王の聲ありと賞美する龍門の原
の上に葬る也骸土に埋むる名に承く聞ゆる孫興公
と云人天台山の賦を作其友范榮期に語てころん是を
地に掘り金王の聲ありと云る

言語巧に偷鸚鷗舌文章分得鳳凰毛

薛壽云人の文を美て其詞の巧なる鸚鷗の言に元稹
文の麗ハ鳳凰の仁義礼智信の文ありて五色の彩美を得る

錦帳曉開雲母殿白珠秋寫水精盤

韓侍郎が詩を美する文章のよきに王殿の錦の帳を
あつらふ暁に開く白珠の清き秋の景色を水精の

時白珠を水精の盤に寫す
云母ハ玉の名

昨日山中之木材取諸已今日庭前

之花詞慙於人
篤茂

花の題して作る詩の序に莊子ハ匠石と云工匠匠石と山を過る
路の傍に櫟あり甚大木なる也匠石伐んと匠石不材として伐す

梁柱もろび板も用いたを不材と云此木不材なるやうあつて
天年を保つ人の女あるや重く用らる終身を損ふと云

不才ハ高言の事也必ずあつてあり此文も序者自ら謙て身乃
不才なりと云今日庭前之花の詩序に書る詞に人に慙と云

王朗八葉之孫徐詹事之舊草

淹一時之友范別駕之遺文

源順

樞の在列出家と尊敬と云順其遺文集其序は作れ
を人の作れ其友の集と云つて其例をひて書る後漢

書は徐詹事の作也八代の末孫は王朗註は作る舊草と云
あつて草と云る文と云て下書は草稿と云意は江淹字文

通文ありて范氏の友也死後に其遺る文を集し
徐と范とハ姓詹事と別駕ハ其人の官也

陳孔璋が詞空病を愈馬相如賦八只雲を凌

陳孔璋詞空病を愈馬相如賦八只雲を凌

贈爵の新恩銘石に刻獲麟の後集八世五を知

贈爵新恩銘刻石獲麟後集世知五

統安樂寺管丞相の庸して作る。逝去の後、贈らる。以言爵を贈爵と云菅原道真卿延喜の御代に右大臣に昇らる。左大臣時平卿二十九歳の若年文筆も菅原公に及ぶ。帝をたもめ諸卿を尊信す時平卿つる。定国卿菅根朝臣を誥ひ諷し。昌泰四年正月廿五日太宰權帥に遷し統安に流され延喜三年二月廿五日五十九歳めて

逝去ある其後雷火度々都焼く。一条院正暦四年五月廿日九大臣を贈らる。同年閏十月廿日太政大臣正一位の宣命下。アて贈爵の文を石に刻て御廟に建らし。新君恩と作り銘と墓誌銘として其人生る世に功あることを志して其庸いづむ。下の句ハ菅家統安して作る詩を集めて菅家後集として今ハ傳たり。獲麟ハ孔子の故事。魯の哀公の時西の狩に麒麟を得る。麟ハ仁獸として聖人の時でハ出る。孔子感して春秋を作ると其文西狩獲麟と云一句で筆を断らる。世にせしめて菅家後集を獲麟の後集と云世の人此集をえて孔子に異るぬ人らるを知と云。孔子の母顔徴在尼丘山の神に祈りて孔子を生り其頂かうが。一て山の形に似られ丘と名づけ字ハ仲尼と云。此對句ハ名をこどもと訓を石に對し爵ハくゝぬるこどもすめと訓もバ麟ハ對せり。

孝
りるのるをせり。くのりるのるをせり。

總歌なるも人のことと云はる。て文詞の部に出。傳のちのちをりる人の言葉ハま信るん。

新豐酒の色、
鸚鵡盃之中に
清冷なる長樂
の歌の聲、鳳凰
管之裏に幽咽
す

新豐酒、色清冷、鸚鵡盃之中、長樂歌
聲幽咽、鳳凰管之裏

公乘億

晉の建威將軍
劉伯倫、酒を嗜
て、酒徳の頌を作
りて、世に傳、唐の
太子賓客、白居易
亦酒を嗜して

晉建威將軍劉伯倫嗜酒作酒徳頌
傳以於世唐太子賓客白居易亦嗜
酒作酒功賛以繼之

白

酒功の賛、
以之に繼

風小臨、
秋の樹

臨風、杪秋樹、對酒、長年人、醉、負、如、霜

葉、雖、紅、不、是、春

白

の如、
是春、
霜葉

生計、
拋來詩

生計拋來詩、是業、家園、忘却、酒、爲、郷

是業、
家園、
忘却、
酒、
爲、郷

茶能、
散悶、
爲、
功、
淺、
萱、
道、
忘、
憂、
得、
力、
微

茶能散悶爲功淺、萱道忘憂得力微

也ども功を爲して
淺萱ハ憂を忘
と道ども力を得
微

茶ハ本草に煩悶といふれぬを直す藥之萱ハ毛詩に出
萱草ハ服して憂を忘るる忘憂草ともいふ功皆淺し唯酒を
夫はさうりてまよしの
忘憂之微ハ遺作

若榮期を使兼
て醉を解せ使
四樂ハ言應三
とハ言不

若使榮期兼解醉應言四樂不言三

醉鄉氏之國ハ
四時獨温和之
天に誇酒泉郡
之民ハ頃未
陰之地を知未

泉郡之民ハ一頃未知
江匡衡

菓則上林苑
之獻ハ所合
自消酒是下若
村之傳所傾甚
甚美

菓則上林苑之所獻
若村之所傳傾甚美
後江相公

先阮籍逢
鄉導ハ爲漸

先逢阮籍爲鄉導漸就劉伶問土風

和漢朗詠集抄卷之六

雜

山

黛色迥臨蒼海上。泉聲遙落白雲中。

勝地本來定。主無大都山。山を愛する人に屬す。

夜鶴眠驚松月苦。曉鶻飛落峽煙寒。

明永國詩抄

雜

山

山高峻。石ある。山と云。山の産之萬物。成産する。

黛色迥臨蒼海上。泉聲遙落白雲中。

百丈山に題せし遠山の色黛に似たるが大なる也。賀蘭暹。蒼海の上にもさぐり高山の泉聲雲より落來るると思ふ。

勝地本來無定主。大都山屬愛山人。

雲居寺に遊て作る景色勝地ハ誰を主とせん唯。賞一觀ん人こそ主るま山を愛する人とハ論語に仁者ハ山を樂とわり仁惠ある人の尊卑を多し。慈愛を多し。山ハ微塵をいとむ故によく大山とるる屬ハつく。

夜鶴眠驚松月苦。曉鶻飛落峽煙寒。

卷之六

雜

月苦曉靄飛
落て峽煙寒

紈扇拋來て青
黛露羅帷卷
却て翠屏明
かり

衆籟曉小興て
林の頂老る群
源暮に叩て谷の
心寒

遙の峯の暮煙を題せる鶴の眠も驚て松間り月
都在中
そのさびしく心苦たさぬ曉靄あつさのむさびえ野衾のし
峽煙ハ山の峽に雲霧のさびしくさほとをのさびさ
体るり又苦をさるるんと訓せ寒をさむんと訓るるわり

紈扇拋來て青黛露羅帷卷却翠屏明

遠山の夕煙晴て山の形明らうにんやと云題之紈扇ハ後山書玉
白絹絹てえまる扇班女が扇の詩の字を取とり夏の部紈涼の詩

女の扇めて顔かくせるが扇を拋まらば青た黛の露と見
ゆるにうとくさう遠山を黛の色とんかましく山の詩首章にて

出羅帷はうまをそのかさむ煙にぬとふ巻却煙のさるさ
翠屏ハみどり色の屏風なる此山かたよ明ハされて山のさるさ

衆籟曉興林頂老群源暮叩谷心寒

秋聲多ハ山に在と云題之籟ハふささるものうて莊子に
地籟則衆竅是已とあり風作て岩の穴枯木の穴かどに
なりもくを衆籟と云秋風に木の葉たわじ色秋深なる
を林の頂が老ると作り群源ハくくこの谷の流くこと

方に岩城うつ水音さこもる谷の心寒と云ハ秋の意之林頂と
谷心ハ山を云老と寒ハ秋のころ籟興と源叩ハ秋声
拾遺集
夕のほろむみささかろる朝日夕向はほふまらるる
大和の三笠山ハ岩むらうこそ笠とかく唯あさ日夕
さだむらうぞと笠笠さすにようさうせり

雲のおおきまのさる山おひさうおわしは年の暮はらうつ
拾遺集
拾遺集年ぬまはと有年のを冬のたあり雲のおおき雲ハか
むさわく越の白山ハ常に雪ある也老さうとさみ雪のつらなを
年の行つらるる
とさへてさうり

みさせば松の葉が白くはさびしくせつめさるるちかふらん
拾遺集
拾遺集よハ入道攝政兼家公家の屏風の
歌らうらうのも深山と雪うた取

山水

山水

泰山ハ土壤を讓
不故不能其高
成河海細流
を厭不故不能
其深と成

泰山不讓土壤故能成其高河海不
厭細流故能成其深
李斯

巴猿一叫停舟於明月峽之
邊小停胡馬忽失
嘶て路を於黃
砂磧之裏に失

巴猿一叫停舟於明月峽之邊胡馬
忽嘶失路於黃砂磧之裏
公乘億

日が礙暮山は
青して簇簇り
天を浸秋水白
して茫茫と

礙日暮山青簇簇浸天秋水白茫茫
西に傾く日山に暮るるの影山簇々として青く
るも秋の水白くして茫茫と天を浸るる山水の影

漁舟の火の影
寒して浪を燒
路の鈴の聲は夜
山越過

漁舟火影寒燒浪驛路鈴聲夜過山
臨江と云馬小やどりて秋夜の作し海人の漁舟の火を
燒魚のようたる波取ると水はうらうらと浪をやくと作りし秋の
寒しと云を勅使かど他国行に天子より印の鈴をよめ
是は馬鈴とも云其聲が馬路の山越するをさくとも

山ハ屏風に似
江ハ簾小似る
を叩て來往す月
の明るる中

山似屏風江似簾叩舷來往月明中
山ハ似て屏風を立し江の水青く簾をたつめ
るにたに月の明るる夜船を浮遊が叩舷は楚辭漁父の歌の字

草木扶疎春風梳山祗之髮魚鼈鼉遊

草木扶疎として
春の風山祇之
髪を梳魚鼈遊
戯して秋の水河
伯之民を養

韓康獨往之栖
花藥舊の如
之泊煙波惟新

山復山何の工
削成青巖之
形水復水誰が家
色

山郵の遠樹ハ雲
の開處海岸の
孤村ハ日の霽時
山向背成斜
陽の裏水ハ回流
小似ハ迅瀨の間

戲秋水養河伯之民

江澄明

山水の策々扶疏ハ枝葉四に布之文輝草木風にかびく山祇の髪
を梳くそある魚鼈を遊び戯るハ秋の水ハ河伯の民を養
ふそあると云 鬲子春秋に山祇以草木爲髮以土石爲身
河伯以水爲國以魚鼈爲民とあるかめと云

韓康獨往之栖花藥如舊范蠡扁舟
之泊煙波惟新

同前

上の同文之後 韓康字ハ伯休仙道を得て山よ入
藥採採て長安の市中に賣とある其人今ハ跡なきを独往之栖
と云 山の藥ハ昔ハ羊舌花も咲范蠡越王句踐をたけ
呉王夫差を亡く功成て扁舟に棹し五湖をひく古のト云るふ
今も其湖の浪と云水煙ハうらと云るを新るると云
雲の詩に陶朱公とある是なり秋見合す

山復山何工削成青巖之形水復水

誰家染出碧潭之色

同前

上に同文之 苔深青と巖の形消立と云と云ふは
景色ハ何の工の志と云と云る水の色碧に藍城多と眼もた
ぬと云るすめる潭ハ誰が家の
染殿の染出せるもや

山郵遠樹雲開處海岸孤村日霽時

直幹

山路の郵駅の遠さ梢ハ雲の末と云るに云く
海にそ濱辺の孤村ハ霽する時と云

山成向背斜陽裏水似回流迅瀨間

山に斜陽のうつる如と云らふ如とあつてさくは云る
山向と背と云る小ハ迅瀨の岩をどにせらるらうつて回流
と云る

拾遺 物ものの君きみにむろの木きをかく一題いしてあると云る立田和州たちだわしゅう

神南備の御室ハ山ハ龍田川ハ水もゆ山水の部ハ入

水 付漁父

邊城之牧馬頻嘶。平沙眇眇。江路之征帆盡去。遠岸蒼蒼。

洲芳杜若抽心長。沙暖鴛鴦敷翅眠。

帆開青草湖。衣濕黃梅雨。裡行。

水驛路穿兒店。月花船棹入女湖。春。

菰蘆抄酌春濃酒。舫艫舟流夜漲灘。

水 付漁父

邊城之牧馬頻嘶。平沙眇眇。江路之征帆盡去。遠岸蒼蒼。

洲芳杜若抽心長。沙暖鴛鴦敷翅眠。

帆開青草湖中去。衣濕黃梅雨裡行。

水驛路穿兒店。月花船棹入女湖。春。

菰蘆抄酌春濃酒。舫艫舟流夜漲灘。

戲漁父之家。菰蘆之杓。舫艫之舟。夜漲之灘。

閑居ハ誰人ハ
於屬す紫宸殿
之本主也秋水
何の處ハ於見
朱雀院之新家
也

釣を垂者ハ魚
得不得暗に浮
遊之意有也
思棹を移者ハ
唯雁を聞遙に
旅宿之時に隨
と感ず

沙頭刻印鷗
の遊處水底書
を摸雁の度時
日脚波平
孤嶋暮風頭岸
遠して客帆寒

閑居屬於誰人。紫宸殿之本主也。秋
水見於何處。朱雀院之新家也。

延喜の御時太上天皇鏡平法皇朱雀院に閑居に秋水
と云願て文會ある岸に閑居する誰人として紫宸殿の
主太上天王御位也つるもの閑に居る秋の水も
しうらんやハ何の處なるも此朱雀院の新家に
こそあると云余の北朱雀の西にある殿也谷に世々乃
帝御讓位の後御座と云るなり

垂釣者不得魚。暗思浮遊之有意。移
棹者唯聞雁。遙感旅宿之隨時。

前小之朱雀院の庭の池に月卿雲空遊興して前云願
て作釣釣者者志あて魚成る魚も浮遊て水成る
しむハ實に意ありと思ふもの水成るものしむ魚成る
わんといふ意ふ船に棹して移行あり雁雁聞て旅の
空の時得る感ずる

沙頭刻印鷗遊處。水底摸書雁度時

水辺の沙の頭に鷗の遊あつて印刻して是は洞庭湖に
雁の度るうげが水底に書け摸るるも是は洞庭湖に
日脚波平孤嶋暮風頭岸遠客帆寒

濱辺に旅の懷のつて波平なる沖に孤嶋の暮風
日の脚西に傾に暮る風吹頭岸なる客の帆寒なる
卒今
卒今
卒今

花のちまくりの秋の
詞花
好た

六十四代圓融院の御時内裏安上ありに大政大臣兼通の家
堀河にあり其女ハ帝の中宮也志しく行幸あり内裏造言まて

禁中

鳳池の後面新秋の月龍闕の前頭薄暮の山

秋月高懸空碧の外仙郎靜翫禁闈の間

住のち御位をりせあひあさび堀河院かす兼通公
よの薨じあひ後此歌いささび御幸の時ある兼通公在世
ふさひあひ水上の定めてささ君う代に
あさびあると水の縁語さそあり

禁中

公の門の禁制ありてあに人を
いささるゆへ禁中と云

鳳池後面新秋月龍闕前頭薄暮山

鳳池の文選の註に中書省を云と日本中務省之其後面
新秋の月がさ内裏の前頭より薄暮かさるの山がさる
闕の宮門の龍の字天子のてに用る漢の高祖龍顔あに
よて龍闕天子の居所ささ内裏と云いささ

秋月高懸空碧外仙郎靜翫禁闈間

八月十五夜雀大と云官人直月をりて酒飲はるる
樂天の送詩碧の空に月が高く清る仙郎内裏
の宿直さる雀大ささて云り禁中の闈門の
あさるむささ静小月翫ひ居ると云

三千仙人誰得聽含元殿角管絃聲

學業試て士に擧らさ城及第と云是も其時の詩と云章孝標
仙人の文人ささ人ささ中我の此管絃聽と云て及第
とげささささささ含元殿の
禁中の殿の名ささ

雞人曉唱聲驚明王之眠鳥鐘夜鳴

響徹暗天之聽

漏刻の策之器の水を盛下に穴を穿てあつう水が漏中に時刻
めさ矢が建時計る雞人の漏刻を司る官人の時が奏さる
雞の鳴るささる右明王は聞て眠を驚あさ夜ま暗天に内裏
の時鳥鐘響耳に徹して聞ると百官禁中に臥さるものささ

朝候日高冠額拔夜行沙厚履聲忙

連句一説に作者菅公と朝の内裏に候候
日高てあささ冠の額拔さるさ急ぐ大内夜行の官人

古京

庭の沙上に履城むくありてさぬ亥の一刻より子の四刻まで
 尤近衛世の刻より寅の四刻まで右近衛の司夜行あり其刻
 履城より弓絃打るをいへて某と名乗子の三ツ世の四と
 奏するにあり近衛司のとおやと云ふ又ハ夜行翁と呼ばり
 御垣も清士のつく火にわぬも御垣のちふくさたけ
 大内の御垣城守夜ハ通用の門一所も内ハ火城の守る
 左衛門右衛門の下ふつふ士の役也衛士と云ふものさつひ
 ともむおまの火城つく戀歌の巻
 とも上の五文字こそ禁中の部か入
 拾遺
 こゝろふひうりこやま秋の月雲の上をひやうも
 延喜の御時八月十五夜藏人所のちのこども月の宴
 りるふとあり藏人所ハ校書殿にあり別當大大臣の帝の御坐
 りり遠くも月月の光さやけさ
 天子の御前清明おまひやうや

古京

古京ハ奈良の都瀬賀の都との
 のじ京ハ高きところをよと訓也

緑草ハ如今麋鹿の苑紅花は定て昔管絃乃の家らん

緑草如今麋鹿苑紅花定昔管絃家

大和国奈良の都ハ元明帝より光仁帝まで七代の京城
 にも桓武帝の延暦年中今の平安城に遷され今此詩ハ奈良の
 古の都あり地城過て作之と繁花の地にて有んも緑の草茂
 今ハ鹿や麋の目る苑とる其中ハ紅の花の咲る如く昔管絃杯
 せし所よりやあんと思ひやる
 感慨

新古今
 そのうらみはなれはなれとてまじりてはなれはなれ
 後人あり

故宫

付故宅

陰森古柳疎

故宫 付故宅

宮闕の故荒るる古宅ハ常人の
 すみあはれとるなり

陰森古柳疎槐春無春色獲落危牖

壞宇。秋有秋聲。

公乘億

色無獲落たる
危牖壞宇。秋の
聲有

漢の武帝の造らるる連昌宮の荒るるに陰森る古柳枝を以て
蹴るる槐の多きある古木也。春伐むてても葉をめぐらす花
を咲かす春の色をぬ獲落るる危き牖壞るる宇わたりて
古に宮殿秋の景色いよ哀なるに風の聲して吹わたりぬ

臺傾て滑石猶
砌の殘簾斷て
眞珠鉤の満不

帝の御女成公主と云其住むる舊宅を題して臺傾て
滑のみりたる石礎なる殘眞珠と云これ簾と斷て殘るる
鉤ももつらぬぞ翠簾はくぞ

強吳滅て兮
棘有姑蘇臺之
露瀼瀼兮
秦衰て兮
虎狼
無咸陽宮之煙

強吳滅兮有荆棘。姑蘇臺之露瀼瀼
暴秦衰兮無虎狼。咸陽宮之煙

河原院の賦に嵯峨天王の御子融の大臣と云ハ限るに
風流の人にて庭は奥州濶竈はらわらふ河原に大臣是れ其失るひ

序序

て後故宅のわたりたるを賦せし此句の心ハ吳王夫差の強り
一も越王句踐に滅さるる姑蘇臺とて名高らるるをわたり

老鶴從來仙洞
の駕寒雲在昔
妓樓の衣をん

老鶴從來仙洞駕寒雲在昔妓樓衣
嵯峨天王の住むる宮のわたりたる後作らるる故宮に老るる
鶴の残り住むるの仙洞の駕と云わん雲のこれびらるる樓とて

孤花露を衰て
殘粉の啼暮鳥
風に栖て廢籬

孤花衰露啼殘粉。暮鳥栖風守廢籬
後の旧院に題する孤花ハ一房開る花之露を美人の涙ハ良春道
るもと云わ女之紅粉は施しぬるも心の傍に想像するも残

荒籬あらいぢ見露みつゆ秋蘭あきらん泣なみ深洞ふかどう聞風きかぜ老檜らうき悲かな

向晚むこう簾頭れんとう生白露なむらぎ終宵しゆうせう床底とこ見青夫みあやう

花の色は残粉も夕暮の鳥の風にかびく枝に極て廢あきらむ

荒籬見露秋蘭泣深洞聞風老檜悲

仁和寺寛平の故宮荒古き檜一本立ちて成りて昔むかし源英明げんえいめい思て作おも荒あらい籬ぢ離り秋の蘭露らんろうはらわいさる昔むかし成なりして

泣くも深さ洞のうら年経る木の風に

いさぶも悲のこゑとさこもわたり

向晚簾頭生白露終宵床底見青夫

我が住屋舎の壞こわれは作つく棟むねもやもて夕の白露むらぎ三善宰相さんぜんさう

君かてあまてる花の板いたるうら月のもふる彼かはぬさうり

うら内裏の跡の月つきはて感慨かんがい板開いたひらけ露つゆののろふ袖そではぬさうり

ぬもかかまてあまそ月のもふる涙なみだの袖そではぬさうり古詩こし思おもふ

君かてうら花はなはるさるの浦うらさびしくもふるさうり

古今集哀傷の部に河原の丸のむらさちさうり身みまうりて後のち

かの家いへにまうりて有あるはむらさちと云いはれぬははれりさうり

よめる五文字君きみまうりてあり楳うめ閑かんと浦うらさびしくもふるさうり

河原院かはらのいん六条坊門ろくじょうぼうもんの南みなみ万里小路ばんりせうじ八町四方やちやうしやうと云いはれぬははれりさうり

いさぶも悲のこゑとさこもわたり

いさぶも悲のこゑとさこもわたり

いさぶも悲のこゑとさこもわたり

いさぶも悲のこゑとさこもわたり

仙家せんか付道士ふだうし隱倫いんりん

壺中こちゆうの天地てんち乾坤けんけん外がい夢裏むら身み名な旦暮たんぼ間ま

仙家付道士隱倫

仙家仙人の言ことは死しせざるな仙せんは儼げん然ぜんと云いはれぬははれりさうり

壺中天地乾坤外夢裏身名旦暮間

世の無常むじやうは作つくる昔唐むかしの長安ちやうあんの市いちに藥くすり賣うる老翁らうおう元稹げんぢん

あり其形そのかたち奇異きい藥くすりの價あたいは論ろんせず汝南にょなんの費あたい長房ちやうぼう市いち榘けい

藥爐之火有
丹伏應雲確
人無水自春
山の底に薇採

雲狀不洞
中に樹栽我鶴
先知

三壺雲のどく浮
七萬里之程浪
分五城霞のどく
峙十二樓之構天
に挿り

奇犬花に吠聲
紅桃之浦に流
驚風葉枝振香
紫桂之林を分

樓上ありて是れは彼翁一ツの壺置て日のつ時人れ
もず壺中に飛入度うんそあそむ人うんと尊と挿り食物
をとり或時翁の云君に金骨の相あり仙道は學ばる
日晩て來りてと教のどく至る我に從て入ると壺中に入長房
つゝ入る壺の中天地日月宮殿樓閣あり侍者數千あり
て老翁扶持敬ふ長房樂にまうらふや古舞忘るる
翁は是に乘て行くと竹竿杖與へる長房乘て長安歸
竹杖杖葛陂と云ぬの水中へ投捨らるる忽ち青龍とらる
天に昇去と神傳ふ出元稹幽梅の詩あり已が栖居壺中
の天地に比別世界ある意は乾坤の外と作らる莊子夢裏
小胡蝶とらるて花苑にあそぶ覺るは夢か醒るか佛
家の目暮もさうさうに意はるる世上の身は夢の如し
藥爐有火丹應伏雲確無入水自春
郭氏の人仙術を學山にあり壽は長遇は其栖居を作らる白
藥爐煨する爐のらんる金液丹銀丹と云仙丹はありあらん
と思はるる雲確ありてあむ人もあそむる水は沸開のまこと
春のつらとえも仙家の器は雲のまはつるも仙人雲母は擣食

山底採薇雲不狀洞中栽樹鶴先知
隱者山居世とく世とく山居心のまはる雲は山の主とせ意
狀はてまはる世とく世とく山居心のまはる雲は山の主とせ意
かて作らる洞の中に樹栽栽は鶴が知ておのが栖と思ふ
人里とハウをりて物まはるるまはるる

三壺雲浮七萬里之程分浪五城霞
峙十二樓之構挿り天
都良香

神仙は題とて策の文へ海中の三山が壺蓬蓬壺蓬蓬瀛壺
瀛洲と云其形壺に似るる三山相をくと七万里上の雲のつと下ハ
大海の波はこらてあると崑崙山に五城十二樓あり仙人常に居
處と拾遺記や史記にあそむ神仙を虚事と云うはと雲と霞大を云
奇犬吠花聲流於紅桃之浦驚風振
葉香分於紫桂之林
同前

謬入仙家入て
半日之客爲と雖
恐ハ舊里に歸て
繞ハ七世之孫に
逢て哉

上と下ト文之晋の大康年中武陵の人溪に魚釣るに桃
の花流る來るま源茂尋のらに桃多々咲き其のくに龍鱗
の文虎豹の班る大あつて奇聲とて吠る其地の人に逢て問
るに秦の乱れ避この処に來數百年経ると桃源記に
此心作驚風あつて風紫の桂ハ仙宮の樹むと天台山の石橋
渡んとせし人あり空に聲あつて此橋越ると器にあはれ
云らば此山に久しく住し仙術修行の後には樹の花の香は
で仙道得しと云らる桂父と云此故事はなり

謬入仙家雖爲半日之客恐歸舊里

後江相公

二条院の文會に相公序者て召せしむる仙家に半日の客と
ふると句之述異記に晋の王質石室山に入て木枝に童はま
る碁城田居りて芝を食て在るる日も夕なり歸ると
まると持する斧の柄折るるを歸るに我住し處もかたり
る人も世人もあつて告て云我先祖山に入て歸らざるものありと
聞つて君ハと一其人もやさしむ吾ハ七世の孫と云故事

丹竈道成て仙室
靜る山中の景
色月花低

丹竈道成て仙室靜る山中景色月花低

石床洞留て嵐
空拂玉案林に
抛て鳥獨啼

石床留洞嵐空拂玉案抛林鳥獨啼

桃李不言不春幾
暮煙霞跡無昔
誰栖

桃李不言春幾暮煙霞無跡昔誰栖

同

こよハ腰句へ仙の去る跡に桃李の花の昔にうらむ咲き
とも悲情のそのち仙人去て幾春は過せしや問ふも不言
漢の大將軍李廣武威るるびからしむ口滯て言て希
ども門前市城る車馬絶る史記に桃李不言下自

王喬一くわしやう去い去えて
雲長斷うんちやう早晚じやんぱん笙しやう聲せい歸き故溪こけい
の聲せい故溪こけいに歸き

商山しやうざんに月つき落おちて秋あき
の鬚ひげ白しろ穎えい水すいに波なみ
揚あて九くの耳みみ清きよ

虚澗きょかんに聲こゑ有あて寒かむ
溜咽りゅうえん故山こざんに主しゅ無な
とて晚雲ばんうん孤こる

夢ゆめ通とほるに夜深よふかぬ
蘿洞らうどうの月つき跡あと尋たづね
るに春暮はるくれ柳門りゅうもんの
塵ちり

成蹊せいせきと云いはれりては桃ももの仙家せんかの樹き煙霞えんかのしれびくのて
主しゅいあともあさむむむ誰たれが栖すまむと云いはれぬ桃李たうり山中しやんちゆう誰たれ栖すまむ

王喬一くわしやう去い去えて
雲長斷うんちやう早晚じやんぱん笙しやう聲せい歸き故溪こけい

こまこま落おち句く上かみに通とほる律りつ一章いちやう之の周しゅうの天てん王わうの太子たいし王子わうし喬きやう同どう
又また王子わうし晋しん好こうて生なまれふさ伊水いすいのわたり遊あそび後仙ごせんと云いはれり七月しちがつ七日にち
白鶴はくかくに乘のり候こう氏山しやんに來きて雲中うんちゆうに笙しやう吹ふくと列仙れつせん傳でんに出いて
小云せううん仙せんを王喬わうきやうに比ひし早晚じやんぱん溪けいに歸き來きんと云いはれり故郷こきやうと云いはれり

商山しやうざん月つき落おち秋あき鬚ひげ白しろ穎えい水すい波なみ揚あ九く耳みみ清きよ

山中しやんちゆうて懐なつひ述のるる商山しやうざん四皓しご雲うんの詩し秦しんの後江相公かうかう
乱らんは避よこてかき居ゐる処ところ月落つきおちと云いはれりの老らうと云いはれり又また
春復物盛はるふつものさかに秋あき冬ふゆの寝ねるも秋あきの鬚ひげと作り堯ぎやうの時とき許由しよと云い
賢人けんじん世よ成なりむと穎えい川のわたり隱ひそる堯ぎやう位ゐ成なりんと召よりれ
憂うれひ聞きりて此川このがはに耳みみ洗あひる時とき巢父さうふと云いはれり牛うしの乳ちを
んとそ來きりて面おもて洗あはれて後耳のちのみみ洗あはるる先耳まへのみみ洗あはるるいかに
と問と答こたへ帝堯ていぎやう我われ成なりりて九州きゆうしゆうの主しゅとせんと云いはれり我われ其その聲こゑ成なり不な淨じやう
と因よりて耳みみ清きよむと巢父さうふ又また罵ののりての楠なんの材ま木きからと云いはれり

嶮けん峯さかに生なまり載のる車くるまの路ちからくる便たりて使つかひて流ながるる末すえに水みづは
及およぶと深ふかくも隱ひそかると聞きゆる其その汚よごるる流ながるる末すえに水みづは

牛うしの口くち洗あはるる牛うし成なり水みづ上かみ牽ひ行ゆく此この故こ事ことは水みづを掬くむ
波なみ揚あと作なるる九くの耳みみと云いはれりの医書いしよに沐浴まくよくするる先九まへくの耳みみ洗あはるる

虚澗きょかん有あ聲こゑ寒かむ溜咽りゅうえん故山こざん無な主しゅ晚雲ばんうん孤こ

山やまに隱ひそかると云いはれり賢君けんきんの世よ皆みな出いではるる云いはれりの紀納言きなごん
間まに虚きょ溜水りゅうすいの流ながるる寒かむいと咽えんひ隱士いんし出いではるる故山こざんに主しゅと云いはれり

今眼いまのまなこにのるるものの晚景ばんけいの
孤こ舟ふねの雲うんのとるる

通夢とゆめ夜深よふかぬ蘿洞らうどう月つき尋跡たづね春暮はるくれ柳門りゅうもん塵ちり

上古しやうこの賢士けんしの風儀ふうぎ成なりて心こゝろの題だい入いるる蘿深らうしん洞どうの中なかに管三品
と云いはれり賢者けんしやありと云いはれりの覺さめてはるる其その賢者けんしやに往いつて逢あはる

と飛立と思おもはれりの夜よも深ふかくも月つきの光ひかりてり渡わたるる夢ゆめに
と心こゝろつと後漢ごかんの邊へん詔みことつとに昼ひる寝ねする弟子でし諫いはるるると云いはれり

周公しゆうこうと夢ゆめ通とほるる静しずかるては孔子こうしと意い成なり同どうと云いはれりの故事こことも
と云いはれり下したの句く故人こじんの栖すまむと云いはれりの跡あと尋たづねると云いはれりの春暮はるくれ柳門りゅうもんの

塵のこゝろ陶潜字淵明彭沢の令とる其門に五株の柳を植
其下に酒を飲つてのころ時に入五柳先生と呼此故事塵ハ
麴塵とて柳の葉の黄るるを春の巻
其外往々釈とて出たり

仙宮に菊をばけて人のいふもるるはよあるとあり寛平の御時
菊合せしむるに盃の臺のやいりうくの作物成り結構せし
してあり其つゝ露の間は時の間成るけり彭祖は菊を服
七百歳成るもち晋の王質木樵に行て困甚成りて斧柯の
くのこゝろ故事酈縣の民菊水成のこゝ
上壽成得るるもこの故事なり

山家

遺愛寺鐘鼓枕聽香爐峯雪撥簾看

白居易廬山の辺に山莊なり草堂成り作東の壁に
五首の詩を題せし其句之山莊近き遺愛寺の鐘ハ枕の響

也首成りて聴此廬山の香炉峯の麓をまじ
居たり其雪成るる山居の景色心も足成り

蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中

白氏雨の夜独宿して都の友寄くる上の句其友朝に仕る百
居て榮達にやるるを蘭省ハ尚書省本朝の大政官の
繁花の處の花の時錦の帳の下に榮達して我をすらしめ思
やうも夫に引く我ハ山中雨夜の草の庵にまじり在

漁父晚船分浦釣牧童寒笛倚牛吹

石壁の水のぞめる閣の上で賦せり日を晩景ハ漁を
父が此浦彼浦と分けて釣せしめて居る寒笛の音の聞え牧
童が牛を牽き吹く吹く倚りたりとふ
心も牛に乘つて吹來るる也

王尚書之蓮府麗則麗恨唯有紅顏

之賓嵒仲散之竹林幽則幽嫌殆非

遺愛寺の鐘ハ枕
成りて聽香爐峯
の雪ハ簾を撥て看

蘭省花の時錦
帳の下廬山の雨
の夜草庵の中

漁父の晩船ハ浦
分けて釣牧童の寒
笛ハ牛に倚て吹

王尚書之蓮府ハ
麗則麗恨唯
有紅顏の賓
のこゝろ嵒
中

晴後青山臨牖近雨初白水門入流

石に觸春の雲ハ枕の上生山峯に銜曉の月窓の中に出

晴後青山臨牖近雨初白水入門流

雨過雲晴青山の青みも牖近く臨初雨あつる
白水溝にあふまきく門の内は流る

觸石春雲生枕上銜峯曉日出窓中

山寺に宿して作る石根に觸て起る雲ハ枕より生ずると橋直草
思ふより臥處にさびさ峯にさむく曉の月も窓の内より出と思

山里ハ地の子びとと我あせのうらうらなほさうらうら

山住ハ万事足らる長も寂もさびもあつらふさびさ世のうらうらなほさうらうら

山里ハ多きさびさうらうらなほさうらうらなほさうらうら

山里ハ四時とあはれ淋しうらうら春ハ花復ハ郭公秋ハ紅葉小のうらうら

草れりうらうらなほさうらうらなほさうらうらなほさうらうら

田家 田畑の近さ

碧毯線頭抽早稻青羅裙帶展新蒲

春胡小顯ヤハ毛ハうらうらと訓糸よて穿く織る敷の白
暮春の比早稻の出る碧の毯の線頭小似う早稻こそ

と訓糸よて穿く織る敷の白
青羅羅の裙や帯に似たり

守家一犬迎人吠放野群牛引犢休

飼犬の足をもとむる人吠野に群る牛が犢を引具
休みあつる田家の餘るまのうらうら

野酌卯時菜葉露山畦甲日稻花風

野酌ハ野の辺に酒飲く卯の時に酒飲ハ葉にるる
白氏文集卯時酒の詩あり又菜木の畦にるる水の味美あり

畦に立秋後の甲の日の風に百穀熟と云也稻花風と作

蕭索村風ハ
竹吹處荒涼
隣月の夜擣
程

明月好
隣家
同

三徑の夜緑楊ハ
両家の春作宜

獨身終身數
相見可子孫長
牆内隣人と作

池邊の別業ハ是
何人ぞ聞道陸
張昔隣村ト

枕に落波の聲ハ

明詠國詩抄

蕭索村風吹笛處荒涼隣月擣衣程

蕭索ハ風の聲荒涼ハあまてまぢやと風の折笛の音高相如
月の下に擣衣のまもらばびと田家の秋のまの隣の家居く
擣衣
妻の風人かまらぬ我ハ花にんはつらな
毎文内付

春の田に種栽時故人か任せとらうとらう治まる世に目
もこうらうとらうと古今六帖ハ貫之の歌あり

時とはなふといふくちぬぞ一むもたてはらうとらうとらう
五月の時栽過一かは早苗も甚老ぬらうとらう
さうぞで早く植よとらう田子ハ早て女やう

このまじさのくはらうのまは猶もよびて秋風の吹ぬ
古今にのみ人あまらとらう一うらうはらう清てらう
稻葉の風に時のうはらう思ふて苗て植ハ昨日のどとらう

隣家

明月好同三徑夜緑楊宜作両家春

元ハと家栽隣らう意栽作る詩の胸の句ハ明月の光好て
吾家も足下の家も同トく三徑栽照してうらうとらう
元卿舎の中ハ三つの徑あり蒙求ふらう人家ハ三つの徑あり
両家の境に楊あり其縁らう我家の春かても有又足丁の家
の春かても有と陸惠曉と張翥と隣ハ池に柳あり一栽
ふまて作とり其故事前表らうびハ此次菅三品の詩出

可獨終身數相見子孫長作隔牆人

上の詩の落句ハ世上ハかくも我らハ獨身栽終らうて數同
度ハかハ面會はらう子孫も互ハ永々牆二重隔る近隣の人らう

池邊別業是何人聞道陸張昔卜隣

池の辺ハ別業栽らめてあらハは何人ぞ昔陸惠曉と張翥
と池栽らて家栽隣らと道ハ聞及りトハ地の古凶栽ト住れとらう

落枕波聲分岸夢當簾柳色両家春

卷之六

雜

七

如渡又文選に川を開水と云に岸に此岸より彼岸に到る
出仕せし時に渡り橋は其ま無餘涅槃の彼岸の道と爲
と云く佛家の煩惱即
菩提のころは成さめり

策馬來時只思風煙之可翫逢僧談

處漸覺世俗之皆空

馬に策て來時只
風煙之翫可也
思僧に逢て談ず
る處漸覺世俗之皆
空と云く成覺

人鳥路の如雲
龍門水越趣

人如鳥路穿雲出地是龍門越水登

龍門水越趣
登

大和國宇多郡龍門寺にむし勤操僧正早の時菅丞相
雨は祈石上布留明神よと法華經讀誦ある藥草喻品
いりて小龍現し雨は降り此處に寺は建龍門寺と名づく
此寺に詣て作る詩に此寺に登るは高くとび空まで雲

三千世界の眼前
前に盡十二因縁
心の裏に空

三千世界眼前盡十二因縁心裏空

竹生鸞の詣て作る近江の湖にちりく渡して世畧都良香
竹觀盡せる心は云三千世界の須彌山にある世界は一国土
と云くは一千つとて小千界と云くは一千つとて中千界と云く
一千つとて大千界と云くは三千つとて三千大千世界と名づく

又貪嗔癡の三毒は各一千の煩惱は具もるは三千世界と
云下の句は此處より十二因縁は觀せよと諸法も心の内
か空々として煩惱の繼のころはかきと云意に所謂十二因縁
無明過去して起る煩惱は胎内に在りて以前の中有なり

行父母交合の義以上の二ッ過去の二因に識父母交合の
胎母の息の入るは胎内に託る名色名は心色色は淫
水赤白其時形肉團の識心識水に託て和合する
六入胎内にて眼耳鼻舌身意の六根のちり現るは成り

泉飛の雨聲聞の
夢洗葉落は
風色相の秋を吹

觸まてに胎内に出二三歳の間に受領納まて松ハ松と思ひ
竹ハ竹と思ふ四五歳の後苦樂取捨の差別あり以上ハ現在
の五果之後十四五歳の後物に愛をも心ある比ま取二十歳
の後物に執着する有義取と同一以上ハ現在の三因なり
生現在の三因によりて未來の生を感する老死今生の身の
まてに死する以上ハ未來の二果も過去の二因現在の五果現
在の三因未來の二果此因果よりなる因縁と云此因縁乃
生死の繼絶と云く三因に流轉する此嶋の境地の幽玄を
心の裏に空すと作し良香上の句を作自愛下の句を思
ふつひるに辨財天夢中に句を教と云ハ怪下好事の説し
泉飛雨洗聲聞夢葉落風吹色相秋
石山寺に詣て作る聲聞僧云飛泉の音雨高相如
似て僧の夢に驚す意洗心の垢を洗ふ色相有爲有
漏の法の色よりなる色なる云樹の葉はさふ山峯の嵐
に草木も無常遷變の仮法かて盛るり色もらうハ黄葉
秋と云ふ散失る哉

佛事

月重山に隱し
扇を舉て之
風太虚の息
樹動之

月隱重山兮舉扇喻之風息太虚兮
動樹教之

佛事

摩訶止觀第一の文之親尊法華經說色一以上中下根
の機にまてグハ法譬因縁の三周の説を備ける譬說の
心成親なる文かて上根の弟子ハ法を聞て悟中下根の輩ハ迷
をてて月の重る山にゆく風の大虚にやまらるるにま

拾遺
まての入おのりてまてにまてにまてにまてにまてにまてに
くまぬハ日の暮ぬる其外
解めらるるべし

こののりてまてにまてにまてにまてにまてにまてに
園城寺に御覽之詞花集ハハるるぬらうかともあり
出家御修行まてに櫻の花夢下ハやまらるる

花山院

智者大師

願ハ今生世俗文字之業狂言綺語之誤或翻爲當來世世讚佛乘之因轉法輪之縁と爲

扇伐擧樹動す人心及て説くこととて古人此意は眞常性の月煩惱の山の隱とバ權謀の扇伐擧て實相の月伐頭す圓音の教風法性の虚の息ぬとバ方便の樹伐動して一乘の風伐訓と翻する○智者大師唐の開皇十四年一夏の間に三種の止觀を説き章安に説き段大師入滅の後有縁を利せんが説て止觀を記すと云

願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤翻爲當來世世讚佛乘之因轉法輪之縁

唐の和三年より十二年の間の詩賦八百首十卷と龍門の香山寺の經藏の納り白氏洛に在り時めて其序なり狂言綺語ハ詩文を成りて佛道修行の外に於ては筆伐法華安樂行品に戒あるを誤と云されども諸法實相峯の嵐谷の響鴉鳴鵲噪を佛法と觀むとバ今この樂天が經藏の納り詩文も來世成佛の因縁と爲すと

百千萬劫菩提の種ハ十三年功德の林

緣ハ心當來ハ未來之讚佛乘と佛が歡喜功德を讚り乘ハ運載の義之轉法輪ハ行住坐卧法の外に出ず人をもち轉ハ車輪伐するをすと云云

百千萬劫菩提種ハ十三年功德林

白氏鉢塔院の如滿大師に從ひ毎年八齋戒を受る白と九度有り其法恩の深しと云思ひ贈る詩今此戒を受ハ多時の間菩提の種を植置してあると云ふ心まじ師の年八十三善根功德の林伐りせると徳を賛る之劫樹語して唐の時と翻譯す又大乘の劫ハ盤石劫とて四十里四方の石伐天人の羽衣して三年に一たび撫て撫尽て劫とい

十方佛土之中以西方爲望九品蓮

臺之間雖下品應足 慶保胤

深草の極樂寺、昭宣公の建立其願文に十方の佛土あはとも西方極樂淨土弥陀如來のまはる方こそ望まじかり

十方佛土之中以西方爲望九品蓮臺之間雖下品應足

東方施德佛東方无憂德佛南方栴檀德佛西南方施佛西方无量壽佛西北方樂德佛北方惟德佛下方命德佛上方光衆德佛中央大日如來十方国土諸佛下之品以上中下之三生あり三々合て九品の佛地蓮臺といふ有進無退の心下品ありとも

十惡と雖引攝す疾風の雲霧を披くも於甚一念と雖今必感應す之を巨海の涓露を納めしに喩

雖十惡引攝甚於疾風披雲霧雖一念今必感應喻之巨海納涓露

極樂寺法華より文之彌陀の悲願十惡の人猶後中書引攝す疾風の雲を拂ひ霧を披く速く身三口四意三とて殺生偷盜邪淫の三ッ身に行ひ守語綺語惡口兩古乃四ッ口の言貪欲嗔意愚癡の三ッ意の取作てこの十惡の誤て把さるる一念彌陀を唱へ極樂に引攝せんといふ稱下へ念する少の善根をも捨るる巨海に涓露の微らるるを納めてさらさぬとく心

昔切利天之安居九十日赤梅檀を刻而尊容成摸今跋提河之滅度二千年紫磨金成塔而兩足成禮す

昔切利天之安居九十日。刻赤梅檀而摸尊容。今跋提河之滅度二千年。瑩紫磨金而禮兩足。

仁康上人丈六の釈迦造り正曆二年三月廿八日河原院にて五時講法行ひる願文に書之佛の飯を志す昔今もかきぬいけり切利天三身六欲天人間あり四天王まで四方由旬四天王より切利天まで四方由旬あり二夏の行成安居と云釈迦三十七の年母摩耶夫人の恩成報せんとして一夏九旬の間天に登りて法説摩訶摩訶羅是とあり其時下界人間に佛在るや千闍国王赤梅檀をて佛像成摸作んとする時帝釈の臣昆首得摩とて道の道成究る下下して像成造りて是天彼王の志成報するなりとぞ下の句ハ如來滅後二千年かゝるる金成塔拜

眼の蓮、豈清涼
の水に養へや。面
の月、長十、五の天
に留る

佛の神通、以て
争酌、盡人僧祇
劫、經も朝宗
せん

凍城叩て肩來寒
谷の月霜拂て
拾盡暮山の雲

磬の聲、城闌て日來の、ひに管絃、奏る聲、と思ひ、目くら
綺羅の花、や、るる、夜、養の人の、も、出入つる、て、祇、夜の、僧、

眼、蓮、豈、養、清、涼、水、面、月、長、留、十、五、天

釈迦滅後の法を結集せんと、並居る、阿難尊者、
有、學、其、席、在、上、座、迦、葉、阿、難、の、手、を、取、結、集、堂、の、外

に、出、り、外、に、在、て、思、惟、忽、阿、羅、漢、果、得、り、神
通、以、て、堵、の、穴、り、入、結、集、堂、の、床、に、上、り、て、衆、を、

世尊再生せり、と、仰ぐ、迦、葉、座、に、起、合、掌、し、て、讚、し、て、云、
淨、滿、の、月、の、如、く、眼、に、青、蓮、の、華、の、若、く、佛、法、大、海、の、水、阿、難、が

心、に、流、入、と、阿、含、經、に、出、る、此、意、以、て、世、間、の、蓮、は、清、涼
水、に、養、は、れ、と、開、阿、難、の、眼、の、蓮、は、尋、常、の、水、の、養、は、れ

あ、が、常、の、月、は、盈、虧、定、る、も、阿、難、の、面、の、月、は、十、五
夜、の、滿、月、は、長、に、天、に、懸、る、と、阿、難、の、德、を、稱、する、詩、

以、佛、神、通、争、酌、盡、經、僧、祇、劫、欲、朝、宗

勸、學、會、の、詩、に、普、門、品、の、文、は、題、と、世、間、の、海、に、
大、ろ、と、い、ふ、大、施、大、子、貝、以、て、汲、尽、り、觀、音、の、弘、誓、の

海、神、通、も、汲、盡、り、と、云、心、智、度、論、に、か、の、大、子、龍、宮
に、往、如、意、の、珠、得、り、衆、生、の、爲、に、宝、雨、降、ら、ん、と、龍、王

傷、て、か、の、珠、棄、り、と、大、子、大、誓、願、起、り、貝、以、て、海、水、を
汲、干、ん、と、次、諸、天、あ、る、と、俱、に、汲、り、海、水、十、に、七、八、渴、ら、

龍、王、栖、の、見、ん、と、我、恐、し、珠、返、せ、と、あり、十、五、を、洛、又、と、す、十
洛、又、度、洛、友、俱、眠、未、陀、阿、度、多、大、阿、度、多、那、由、他、と、次、弟

一、六、十、數、に、至、て、僧、祇、と、云、劫、時、と、云、朝、宗、百、の、水、海、宗、と
し、て、朝、宗、の、義、誓、の、海、に、く、時、々、と、も、方、水、集、ん、と、大、子、釈、迦

叩、凍、肩、來、寒、谷、月、拂、霜、拾、盡、暮、山、雲

勸、學、會、に、提、婆、品、の、心、は、作、り、釈、迦、因、位、の、時、慶、保、胤
轉、輪、聖、王、と、七、室、の、富、に、あ、り、深、く、道、心、發、し、

去、來、も、阿、私、仙、の、我、妙、法、蓮、華、の、大、衆、の、法、は、ま、り
我、小、從、説、聞、ん、と、忽、位、大、子、に、あ、り、山、小、ま、り、山、小、入

公、水、汲、せ、山、の、菓、拾、せ、王、の、心、は、難、行、を、う、さ、給、く
つ、る、大、衆、の、法、得、此、心、は、作、る、谷、水、の、凍、城、を、た、や、と、ま、る

月、の、寒、肩、來、る、霜、打、ち、ひ、雲、う、ら、峯、の、菓、拾、ひ、
雲、拾、ひ、尽、す、り、行、基、の、歌、も、法、海、に、く、時、々、と、も、

卷之六 雜 廿三

己に終て未千年
の役習未初て
遇難一乗の文
得

己終未習十年役初得難遇一乗文

上通して一章十善の君の位はまてくことあり苦勞同
るん役習六法の爲りて其あも千年の艱難のあもく
遇難一乗の文法華經得るん方便品に十方佛土中
唯一乗法無二亦無三二一説上の句終身習せとて心之

けせよてやそひのた縁はうつむば思ひくことあり
君ハ弥陀のう來世の引接あるべき身とする此世やそひの
心はうて功力はうて其花は實なる詞の縁あり

新古今
おれだるこもこもひの心も我立松に冥加あもる
桓武帝延曆年中比叡山開基一根本中堂建立あり時の
歌阿耨多羅三藐三菩提の佛ハ無上正編智覚うも

加護いも今かく松そ建立あり天下太平祈願道場
松比叡山之又林木はいとむ松と云く冥加佛の暗よ
城經營のふ城上もかく正くあゆみ智覚ある諸の佛は

千載
こらくはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる
拾遺集六仙慶法師の歌へ十五億土と聞つるも
勉む去此不遠なりをるるはるるはるるはるるはるる

と君と思ひあ茶を法のをめかぞらつてはるる
天曆の御時故后の宮の御賀せよまんとまらるるに宮うせまひ
りまはやぐ其のうけて御諷誦行せまひらるの御詠なり

拾遺
僧
まのせんと儲まらひ若菜は思の外今日の法事に摘まらま

蒼茫霧雨之晴初寒汀鷺立重疊煙

嵐之斷處晚寺僧歸

月水園字少

僧

蒼茫霧雨之晴初寒汀鷺立重疊煙

嵐之斷處晚寺僧歸

月水園字少

僧

蒼茫霧雨之晴初寒汀鷺立重疊煙

嵐之斷處晚寺僧歸

月水園字少

寺に僧歸

野寺に僧を言歸
に月帯帶芳林
小客携携醉て
花に眠

堂の母儀有以
中天の月に於逗
留するも莫室の
師跡有以五臺
之雲に於偃息
するも莫

良言居士抄

卷之六

宗

十五

閑居の賦之霧を雨の蒼茫かす晴る處は張讀

寒の汀の鷺の立る寂たる煙嵐の重疊する少し

断處より僧の寺に歸る

ののちにも晩景のこゝろ

野寺訪僧歸帶月芳林携客醉眠花

野邊にあり寺に僧を訪ふ夜に入りて歸る月帯帶と

云々芳林の禪林の心か客携携ひ手携携つ花に眠る

醉るまろ心地と眠る此詩醍醐一条寺の僧正に逢歸依れ

思わつて作る或説鮑溶の作して東郊の道先處士に贈る云

堂有母儀莫以逗留於中天之月室

有師跡莫以偃息於五臺之雲

奮然法橋入唐の時餞別詩序堂殿之正寢て父母を
居るを云々て母堂と云五臺山の中央を中天竺と云父
母在るとい遠く遊ずるとい彼地に久く逗留するを
歸て母にまゝとて室の房に五臺山の文珠垂跡の地を

師の跡も荒れといも五臺の法にのぞむも偃息すに
歸て我急だくと云遠く遊べとい月を對しなり奮然
渡海の願文に先五臺山に参り文珠の耶身に逢んと欲す
次中天竺に詣釈尊の遺跡禮せんと欲すと云々

明鏡乍開隨境照白雲不著下山來

僧の徳徳賛る詩之智慧ハ明鏡の下に方境至すと云く野相公

照す僧の明雲の偈もて山に住が適都に來るは白雲も著

觀空淨侶心懸月送老高僧首剃霜

源の順南都の般若寺奉りて老僧頭剃りて出遊順

る當意の作る般若の理ハ有爲空無爲空畢竟空を

りめく空を觀すると寺号をうてて浄侶ハ僧に諸法空寂

のひびけ觀るも心の月明り老僧送る僧の白髮剃霜と云

鶴閑翅刷千年雪僧老眉垂八字霜

鶴ハ諸鳥の内に閑なるもの此角は翅をいつくろく源爲憲

雪を刷て眉ハ八字の形の眉毛に白毛を生むは霜

明鏡乍開て境に
隨て照白雲著不
山を下て來

空を觀る浄侶
心の月懸老僧
送高僧の首に霜
剃

鶴閑翅刷千年
年の雪刷僧老
て眉に八字の霜

明永國字抄

卷之六

宗

十五

張讀

良言匯正抄

卷之六

新

廿七

和漢朗詠集抄卷之六 終

